

CECILY BROWN

セシリー・ブラウン



ニューヨークのアトリエにて Photo by Mark Hartman

「歴史」との対話から生み出す、 具象と抽象が交差する絵画的実践

古典、近代、現代の絵画から大衆文化まで、様々なモチーフを参照し、セクシュアリティや欲望についての問いを示唆する絵画をつくり出すセシリー・ブラウン。日本での初個展に際して、抽象と具象、色彩と動きにあふれる絵画の制作方法について話を聞いた。

山本浩貴(文化研究者)=聞き手・文 Interview&Text by Hiroki Yamamoto

どれほど抽象的に見えたとしても、かたちや存在を看取することのできる具象性の余地を残しています

画

家セシリー・ブラウンは1969年にロンドンで生まれ、90年代半ば以降はニューヨークを拠点に制作活動が続けている。英国在住の芸術家マギ・ハンプリングの指導で芸術に目覚め、その後はロンドンのスレード美術学校で絵画を修めた。ブラウンにとって「生まれて初めて会った本物の芸術家」であったハンプリングからは、「ドローイングにおける多大な影響だけでなく、「他者を尊重する人格や作家としての真摯な姿勢」を学んだ。いつぼう、彫刻家でパフォーマンス・アーティストでもあるブルース・マクレーンらが教授を務めていたスレード美術学校では、「教員からだけで

はなく、時には激しい議論を重ねた同世代の仲間からも多くのことを吸収しました」とブラウンは回顧する。

ブラウンはヨーロッパ諸国やアメリカで数多くの展示に参加し、欧米ではその名を広く知られている。日本でも、例えば2006年に大阪の国立国際美術館で開催された「エッセンシャル・ペインティング」展では、ピーター・ドイゲやマルレーネ・デュマスら本邦でもよく知られた画家たちの作品と一緒にブラウンの絵画も並べられた。とはいえ、欧米諸国に比べて、ブラウンの作品が——その奥深さを知るのに足るほど——日本でしっかりと紹介されてきたとは言いがたい。

現在、BLUM & POE 東京で開催中の「The end is a new start (終わりは新しい始まり)」展は、ブラウンの日本での初個展である。その意味で、同展は注目に値する。

「エッセンシャル・ペインティング」展を企画したキュレーターの中西博之は、ブラウンの絵画の特色として、画面全体において「モチーフと筆触のいざれかが、他方を支配するのではなく、ほぼ対等の関係に保たれる」ことを指摘する。この指摘と関わるが、ブラウンの作品には具象と抽象という相反する要素がバランスと緊張関係を保持したまま混在し、それゆえに静謐でありながらも同時に特異なダイナミズム

を有している。アーシル・ゴッキーやフィリップ・ガストンといった初期抽象表現主義の作家を先例に挙げながら、ブラウンは自身の作品もまた「具象が抽象に変わり始める瞬間」をとらえようとしていると述べる。そのため、それらのなかには、「どれほど抽象的に見えたとしても、かたち (Form) や存在 (Presence) を看取することのできる具象性の余地を残しています」と彼女は説明する。

色彩の推進力とモチーフの射程

《ハイ・ソサエティ》(1998)などの1990年代後半以降の作品群では、絵画を構成する多種多様

な要素のなかでも、とくに色彩への関心が突出しているように筆者には感じられた。インタビュではそうした見方をブラウン本人に伝え、それについてどのように思ふか、そして、(もしそうであれば)現在までにその関心に変化があったのか尋ねた。すると、「確かに90年代後半には様々な異なる色彩を実験的に用いることが多くなりましたが、画家としての関心は今日までほとんど変わっていません。色彩にはつねに強い興味を抱いてきました」と述べ、次のように続けた。

「色彩が作品の推進力(Driving force)となつているように見えるというところえ方は、私にとつても興味深いですし、そのように言っていただけることをたいへんう

れしく思います。私の絵画の主題に着目する人は多いですが、絵画を構成する要素自体に言及する人はそれに比べて多くありません。ご指摘の通り、私は作品のなかで色彩、そしてほかにも光や空間などの多様な要素について並行して考察してきました。これまで色彩や素材に関するたくさんの実験を行い、そのたびに新しい発見を得てきました」。

抽象的でありながらも同時に具象的でもあるブラウンの絵画には、多様なモチーフが——時にそれとはつきりとわかりにくい形態であることもあるが——登場する。例えば、90年代半ばに制作された初期作品に頻出するウサギの(ような)形象。振り返ってみると、このモチーフにつ

いて質問したとき、筆者は性やジェンダーにまつわる関心という回答を無意識に期待していたように思う。だが、そうした期待に反して、初期作品におけるウサギのインスピレーション源にはポップ・アートの旗手ジャスパール・ジョーンズによるドローイング作品《Rabbit/Duck》(1990)があったとブラウンは答えた。また、見方によってウサギにもアヒルにも見える同作を目にして以来、これまで錯視(optical illusion)や、絵画を通じて「人がものを見るときに生じている現象」という意味での知覚(perception)と戯れることに関心を抱いてきたともブラウンは語る。後述するように、性やジェンダーといったテーマが彼女の

絵画実践にとつて重要であることは疑いない。それゆえ、むしろこのことから、彼女の画家としての関心の射程の大きさを読み取るべきであろう。

本展では、近年にブラウンが開始した2つの新しい試みが披露されている。そのひとつが、ここ数年にわたつて彼女が探求してきた「難破船」というモチーフである。ブラウンはウジェーヌ・ドラクロワやテオドール・ジエリコーなどの美術史に足跡を残す先人たちの絵画について独自に研究を重ね、そうしたリサーチの成果を自らの作品制作に生かしてきた。今回の個展に出品されている作品群の下敷きとなつているのは、英国ビクトリア期の画家ウィリアム・エッティ——とりわけ、彼

画家は成長の過程で様々な時代の優れた作品から学び、そのなかで自分自身の声を発見していくものだと思います



上—The Triumph of the Siren 2021 リネンキャンバスに油彩、UV硬化型インク
58.4×94×4.2cm Photo by Genevieve Hanson



下—Nocturne in Blue 2021 リネンキャンバスに油彩、UV硬化型インク
59×94×4.2cm Photo by Genevieve Hanson

の絵画《セイレーンたちとユリスーズ》(1837)である。ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』におけるワンシーンを描いた同作では、海上での惨事を招く元凶としてのセイレーンの存在が主題となっており、ここでは男性中心の世界における脅威の象徴としての女性のセクシュアリティが前景化されている。そのような点で、ブラウンの新しい作品群は、絵画実践の創造的反復とそこから偶発的に生じる差異を通して、歴史的表象における男女間の不均衡な権力関係を、現代において再考しようとする試みとして解釈することもできる。ブラウン自身も語ったように、「難破船」というイメージの探求は、「性」「ジェンダー」「暴力性」「淫靡さ (basely)」といった、彼女の芸術活動において一貫してきた関心群と地続きに連なっている。

自分自身を含めた 「過去」を参照すること

ブラウンは美術史上に刻まれた膨大な量の絵画を研究し、それらを巧みに参照しながら自身の作品を構築してきた。その射程はエッティのような古典絵画からジョーンズのような戦後美術、クリストファー・ウールのような同時代の現代アーティスト、さらにはポップ・ミュージックのアルバ

ム・ジャケットにまで及ぶ。ブラウンが駆使する「参照項」の種類は驚くほど幅広い。自身の絵画制作プロセスにおける過去や同時代の作品に関するリサーチを、ブラウンはどのように位置づけているのか。「幼いときからドロイニングや絵画を見ることも描くことも好きだったので、ギャラリーや美術館に行つて、ほかの作家の手による作品と『会話』や『対話』を交わすことは昔から自



This must be the place 2017-21 リネンキャンバスに油彩
73.7×58.4cm Photo by Genevieve Hanson

然なことでした。優れた作品は、いつも私に刺激と活力を与えてくれます。そのような作品に関して、『古い』ものと『新しい』ものを区別したことはありません。他者の気に入った作品を自らの作品に取り込んでいくのも、自然な流れでした。画家は成長の過程で様々な時代の優れた作品から学び、そのなかで自分自身の声を発見していくものだと思います。ですが、ほかの作家の作品を自らの絵画に直接的に取り入れることはありません。ピーテル・パウル・ルーベンスなどのすばらしい筆致や開放性をドロイニングやスケッチとして模写することはありますが、それは偉大な画家たちがど



The chagrin of the skinnymalinks 2017-21 リネンキャンバスに油彩
58.4×73.7×4cm Photo by Genevieve Hanson

のように世界を眺めていたのかを深く理解し、そうした人々の視点を自身の作品に取り入れるための学びの技法です。ですの、私は自分の絵画を描くときに、他者の作品を見ながら描くことはありません。

本展では、もうひとつの注目すべき新しい挑戦がなされている。絵画史上の巨匠たちが制作した



「The end is a new start」展の展示風景 Photo by Katsuhiro Saiki

作品ではなく、自分自身の過去作に目を向けるという試みである。ブラウンは1990年代全般から2000年代初期に自らが制作した作品群を改めて振り返ることで、過去の己自身を次なる探究の参照項すなわち触媒として用いている。この発想はどこか

から来たのか、そしてどこへと向かうのか聞いた。「このアイデアは4年前にデンマークでの私の展覧会に際して思いつきました。私は過去20年に及ぶ版画を集めた展示室を準備したかったのですが、それら全部を探し出すことは非常に困難だと気づきました。そこで、数多くの初期の主題を再利用しながら新しく作品を制作することにしました。それらの作品を見ているうち、そこには1990年代から現在までに私が取り組んできたほとんどあらゆる主題が反映されていることに気づきました。そのとき、かつて自身の作品で扱った主題を再訪し、そこから新作を生み出す発想が浮かびました。ある意味、今日までの30年にわたる画業を振り返っての『自己分析』とも言えるかもしれません。とはいえ、たんなる『描き直し』ではなく、現在の視点から何を新たに見出すこと

ができるかをつねに考えて描いています。すると、これまで気づかなかった興味深い発見がたくさんあり、昔からの関心に新たな刺激が与えられることも楽しんでいきます。ですので、今後この試みを継続していくつもりです」。

インタビュ어의最後に、「自己分析」の結果はいかがでしたか?」と尋ねた。するとブラウンは微笑みながら、「もちろん、自己分析といっても精神科医が用いる意味でのそれではありません。ですので、あくまで画家としての

自己分析ですが……と前置きしてこう語った。「私が画家として必要としているものが、それほど多くないのだとわかりました。これまでいくつかの主題や関心を様々に変奏しながら描いてきたということですよ」。ブラウンの絵画実践を貫く限られた主題は、今回の「The end is a new start」展で披露された作品群においても、微妙な、しかし重要な意味を含む差異をはらみながら巧みに反復されている。

*1 「エッセシャルペインティング」国立国際美術館 2006年。

■ CECILY BROWN

1969年ロンドン生まれ。93年にスレード美術学校(ロンドン)を卒業、現在ニューヨークを拠点に活動中。主な個展に、ソフィア王妃芸術センター(2004、マドリッド)、ホストン美術館(2006-07)、トリノ現代美術館・市民ギャラリー(2014)、ルイジアナ近代美術館(2018、デンマーク・フムレバック)、プレナム宮殿(2021、イギリス・スウッドストック)など。作品は、ホイットニー美術館(ニューヨーク)、メトロポリタン美術館(ニューヨーク)、テートモダン(ロンドン)などにコレクションされている。

■ INFORMATION

セシリー・ブラウン

「The end is a new start」展

2021年10月22日～1月15日、Blum & Poe(東京)で開催。本展では、作家が近年探求してきた「難破船」という歴史的表象についての考察、そして30年のキャリアのなかで生まれてきた自身の過去作品を新しくリミックスするという2つのテーマで、計12点の新作を展示。

🕒 12:00～18:00 📅 日、月、祝

📍 東京都渋谷区神宮前1-14-34

原宿神宮の森 5F

☎ 03-3475-1631

Cecily Brown

A Painting Practice where the Figurative and the Abstract intersect, Born out of a Dialogue with "History"

Cecily Brown creates paintings that raise questions about sexuality and desire, through references to various motifs from classical, modern, and contemporary paintings to popular culture. On the occasion of her first solo exhibition in Japan, she discusses how she made these paintings, which are full of abstraction and figuration, color and movement.

Text by Hiroki Yamamoto (cultural researcher)

The painter Cecily Brown was born in London in 1969 and has been based in New York since the mid-1990s. Her artistic awakening came under the guidance of British artist Maggi Hambling, and then studied painting at the Slade School of Art in London. For Brown, Hambling was "the first real artist I met in my life" and she was not only "a great influence on my drawing" but also "a personality that respects others and has a sincere attitude as a writer". On the other hand, at the Slade, where sculptor and performance artist Bruce McLean and others were professors, Brown recalls that she "absorbed a lot not only from teachers but also from my peers who sometimes had intense discussions."

Brown has participated in numerous exhibitions in European countries and the United States and is widely known in the West. In Japan, for example, at the "Essential Painting" exhibition held at the National Museum of Art, Osaka in 2006, Brown's paintings were also exhibited along with the works of well-known painters in Japan such as Peter Doig and Marlene Dumas. However, it is hard to say that Cecily Brown's work—whose depth takes time to appreciate—has been well introduced in Japan compared to Western countries. "The end is a new start" exhibition currently being held at Blum & Poe Tokyo is Brown's first solo show in Japan. In that sense, the exhibition is noteworthy.

Hiroyuki Nakanishi, who organized the "Essential Painting" exhibition, observes that a feature of Brown's paintings is: "Not one of the motifs and brushstrokes dominates the other; they are kept on an equal footing" (Footnote 1). In connection with this point, Brown's work mixes the contradictory elements of figuration and abstraction while maintaining balance and tension, and therefore has a quiet yet peculiar dynamism. Citing early abstract expressionist writers such as Arshile Gorky and Philip Guston as pioneers, Brown states that her own works are also trying to capture "the moment when figuration begins to turn into abstraction." As such, she explains, "no matter how abstract they may seem, there is still room for representation in which form and presence can be seen."

The Driving Force of Color and Range of Motifs

In works from the latter half of the 1990s such as *High Society* (1998), I felt that the interest in color was particularly prominent among the various elements that make up the painting. In our interview, I shared that view with Brown herself, asking what she thought about it, and (if any) how her interests have changed to date. To this, she said: "It is true that in the latter half of the 90's, I experimented with a variety of different colors, but my

interest as a painter has hardly changed to this day. I have always had a strong interest in colors." She continued as follows.

"The view that color seems to be the driving force of the work is interesting to me and I am very pleased you said that. Many people focus on the subject matter of my paintings, but not many people mention the elements that make up the painting. I've been thinking about how the colors in my work run parallel to various elements such as light and space, as you have pointed out. I've done a lot of experiments with colors and materials, and each time I've made new discoveries."

In Brown's paintings, which are both abstract and at the same time concrete, a variety of motifs—sometimes in distinct and confusing forms—appear. For example, the image of a "rabbit"(like) form that appears frequently in her early works of the mid-1990s. Looking back, when I asked about this motif, I think I was unconsciously expecting an answer about an interest in sex and gender. However, contrary to those "expectations," Brown replied that the source of inspiration for the "rabbit" in her early work was the drawing "Rabbit / Duck" (1990) by pop art pioneer Jasper Johns. She explains that ever since she saw this work, which looks like a rabbit or a duck depending on how you look at it, she has been interested in playing with this "perception" in the sense of how it has been used to mean "optical illusion" and "a phenomenon that occurs when people see things" through paintings. As we will see later, there is no doubt that themes such as sex and gender are important to Brown's painting practice. Therefore, rather from this, one should read the magnitude of the range of her interest as a painter.

"The end is a new start" presents two new initiatives that Brown has made in recent years. One of them is the motif of shipwrecks that she has been exploring over the last few years. Brown has independently researched the paintings of ancestors such as Eugene Delacroix and Théodore Géricault, who have made a mark in art history, and has applied the results of such research to her own work. Underlying the works exhibited in this solo exhibition is the Victorian British painter William Etty—especially his painting *The Sirens and Ulysses* (1837). This work, which depicts a scene from Homer's epic *The Odyssey*, focuses on the existence of the siren as the cause of catastrophe at sea. Sexuality is foregrounded with the female as a symbolic threat in a male-centered world. In that respect, one can also interpret Brown's new series as an attempt to rethink the imbalanced power relationship between men and women in historical representation through the creative repetition of painting practice and the accidental differences that arise from it. As Brown says herself, the quest for the image of a "wreck" is a continuation of her consistent artistic interests, such as "sex," "gender," "violence," and the "nasty."

To Refer to the "Past" including yourself

Brown has studied a vast number of paintings etched into the history of art and has constructed her own works through skillful reference to them. As we've seen, these range from classical paintings like Etty's to post-war art like Johns, to contemporary artists like Christopher Wool and pop music album covers. The variety of references used by Brown is surprisingly wide. How does Brown position her research on past and contemporary works in her painting process? "Since I was a child, I loved seeing, drawing and painting, so it has always been natural to go to galleries and museums and engage in 'conversations' and 'dialogues' with works by other artists. Outstanding works always inspire and energize me. I have never made a distinction between "old" and "new" works. It was a

natural process to incorporate them into my own work. I think that a painter can learn from excellent works of various eras through their process of growth and discovers their own voice in it. However, I do not directly incorporate the work of other artists into my own paintings. I sometimes copy Rubens' wonderful brushstrokes and openness in my drawings and sketches, but that is just a learning technique to gain a deeper understanding of how the great painters looked at the world and incorporate those perspectives into my own work. So, when I make my own paintings, it's not that I am painting while looking at the works of others."

"The end is a new start" presents another notable new initiative. It is Brown's attempt to focus on her own past works, not works produced by masters in the history of painting. By looking back at her works from the 1990s to the early 2000s, Brown uses herself as a reference for her next quest, that is, using herself as the catalyst. I asked her where this idea came from and where she was heading. "I came up with this idea four years ago for my exhibition in Denmark. I wanted to show a room of prints spanning twenty years but realized it would be too hard to find them all, so I decided to make new ones, using a lot of my early subjects. While I was looking at the prints, I realized that they reflect almost every subject I've been working on from the 1990s to the present. So, I revisit subjects I once covered in my work and come up with ideas for creating new works. In a sense, you could call it a "self-analysis," looking back on my labor of painting over the past 30 years. However, it is not just a "rewrite", but about what can be newly discovered from a current perspective. I'm always thinking about what I can do, and I'm also enjoying the fact that there are many interesting discoveries that I haven't noticed before, and that I'm also enjoying giving new stimuli to my old interests, so I will continue to attempt this in the future."

At the end of the interview, I asked, "What was the result of your 'self-analysis'?" Brown smiled and said, "Of course, self-analysis does not mean the type used by psychiatrists; it is just self-analysis as a painter... I learned that as a painter I don't need that much. I've been painting a number of subjects and interests with many variations." Brown's painting practice of skillful repetition with subtle but important differences is reflected in the works on view in "The end is a new start."

Cecily Brown

Born in London in 1969. She graduated from Slade School of Art (London) in 1993 and is currently based in New York. Major solo exhibitions include Reina Sofia (2004, Madrid), Boston Museum of Art (2006-07, Massachusetts), Turin Museum of Contemporary Art and City Gallery (2014, Turin), Louisiana Museum of Modern Art (2018, Denmark), Blenheim Palace (2021, Oxfordshire) and others. Her work is in the collections of the Whitney Museum of American Art (New York), the Metropolitan Museum of Art (New York), and the Tate (London).

Cecily Brown "The end is a new start"

Held at Blum & Poe (Tokyo) from October 21, 2021, to January 15, 2010. In this exhibition, there are two themes: the historical representation of "shipwrecks" that the artist has been exploring in recent years, and the artist's remixing of her own past works made during her 30-year career. A total of 12 new works are on view.